

2017年度 シラバス情報表示画面

科目コード : 93513 単位数 : 4

科目名	東洋文化史	科目責任者	林 俊雄
課題と試験担当教員			
履修方法	T テキスト学習		
ナンバリング	CTETC422		

■ 科目概要

この科目では、中国を中心とする所謂「漢字文化圏」の文化を形成するにあたって重要な役割をもった「漢字」について、その成立、変容および現状については無論、周辺地域への影響についても学ぶ。

■ 到達目標

「漢字」は、歴史的にも、地域的にも、バリエーションに富んでおり、単に「東アジア」に止まらず、北アジアや東南アジアなどの周辺地域への拡がり、受容の仕方について知ることによって、自己の属する地域とは異なる地域の特性、すなわち異文化を理解する力を身につけることを目標とする。

■ 科目の計画・内容

学習範囲 該当する章など	学習内容
1. 漢字の誕生－骨と甲羅に刻まれた文字－：はじめに：漢字とはいかなる文字か、漢字の書体と字体とは何か	漢字を論じる前提として、漢語という言語を表記するシステムとしての漢書の性格を理解する。 漢字の歴史を知るためには、 阿辻哲次『図説漢字の歴史』（大修館書店 1989 ¥3672）、 笹原宏之『漢字の歴史－古くて新しい文字の話－』（筑摩書房 ちくまプリマー新書 2014 ¥886） 阿辻哲次『漢字文化の源流』（京大人気講義シリーズ）（丸善 2009 ¥1944）
1. 漢字の誕生－骨と甲羅に刻まれた文字－：甲骨文字概説：甲骨文字の発見と発掘、殷王朝と甲骨文字、甲骨文字の作製	最古の漢字である甲骨文字を生み出した殷（商）王朝や、甲骨文の内容など、甲骨に関する基本的な知識を習得する。 甲骨文については、白川 静『甲骨文の世界－古代殷王朝の構造－』（平凡社 東洋文庫 1972 ¥2376）
2. 漢字の起源－甲骨文字の仕組みと陶文－：甲骨文字の解読方法、甲骨文字の特徴	未知の文字であった甲骨文字はどのようにして解読されたのか、まずその方法について解説する。 甲骨文字の読み方については、落合敦思『甲骨文字の読み方』（講談社 講談社現代新書 2007 ¥777）
2. 漢字の起源－甲骨文字の仕組みと陶文－：甲骨文字以前の「文字」と漢字の起源	新石器時代から殷代にかけての土器や陶器に記されたさまざまな文様から漢字の起源を考える。
3. 青銅器に鑄込まれた漢字－金文の誕生と展開－：青銅器文化の発展	金文とは殷周時代の青銅器の上に特殊な技術を用いて表出された文字である。金文が記される青銅器自体の特質と歴史を概観する。

学習範囲 該当する章など	学習内容
3. 青銅器に鑄込まれた漢字－金文の誕生と展開－：金文の特徴	金文作成の技術を理解したうえで、金文と甲骨文字との違い、殷代から周代にかけて文字の上になどのような変化が生じたのかを考える。 金文については、白川 静『金文の世界－殷周社会史－』（平凡社 東洋文庫 1971 ¥2484）
4. 多様化する漢字－戦国時代の文字－：漢字の広がり	分裂する時代を背景に、戦国時代には多種多様な文字が現れた。その時代背景と戦国時代の漢字の内容について考える。
4. 多様化する漢字－戦国時代の文字－：戦国文字概観－多様化する書写メディア	字体や書体の上に生じた前時代とは比べ物にならないほどの多様性の実相を各国の出土遺物にみたうえで、その多様性はどのような要因によってもたらされたのかを考察する。 戦国時代の文字については、江村治樹『春秋戦国秦漢時代出土文字資料の研究』（汲古書院 汲古叢書 2000 ¥22,000）
5. 屈原の書いた漢字－戦国時代の楚の言語表現システムと国ごとの違い－：楚簡の世界	戦国時代の文字資料は概して断片的でまとまりを欠き、戦国各国における文字使用の全貌を系統的に解明するのは困難である。その中において竹簡に書かれた筆写文字が多数出土しているのが楚である。今回は、まず、戦国文字の研究の歴史を概観した後、戦国時代の楚簡の出土と楚系文字の実態に、簡略化（筆画の省略、構成要素の省略、省略記号、筆画の共有、合字、煩雑化（飾筆、表意的偏旁の付加、表音的偏旁の付加）、変形（字形、意味、発音）、および訓読について見てみる。 楚簡については、浅野 裕一『竹簡が語る古代中国思想－上博楚簡研究－』（汲古書院 汲古選書 2005 ¥3,780）
5. 屈原の書いた漢字－戦国時代の楚の言語表現システムと国ごとの違い－：戦国文字鳥瞰	今回は、楚簡を含めた戦国時代の諸国（秦・燕・斉・中原・楚）の文字の異同について見てみる。戦国時代に現れた新しい変化を反映しやすい日常的な事態を考察するために、「馬」「乗」「百」の3文字を取り上げ、その形の違いについて見た後、ある語がどのような文字で記されるかという観点から、武器の鑄造を著す「造」を取り上げて、各国の文字を考察する。 富谷 至『木簡・竹簡の語る中国古代 増補新版－書記の文化史－』（岩波書店 世界歴史選書2014 ¥3240）
6. 隷書の誕生と文字統一－古代文字の終焉－：隷書の成立	隷書の誕生と文字統一は、漢字史上の二大変革である。隷書によって漢字は原初の象形性を失い、限られた筆画を組み合わせて文字を構成する「近代的」漢字が生み出される。その具体的な諸相を考察する。 隷書については、西川 寧編『新装版 書道講座 7 隷書』（二玄社 2010¥2592）
6. 隷書の誕生と文字統一－古代文字の終焉－：文字統一、文字統一の実態－被占領者の文字	秦の始皇帝の文字統一は、実質的には隷書による統一であった。文字統一はなぜ必要であったのか、どのような事業であったのか、またその意義などを、統一前後の出土資料から考える。 秦の始皇帝については、鶴間 和幸・著『秦の始皇帝－伝説と史実のはざま－』（歴史文化ライブラリー）(吉川弘文館 2001 ¥1836)
7. 漢字の完成－楷書の誕生と規範化－：隷書の変容と楷書の誕生	我々が現在使用する楷書体がどのように成立したのかを、その歴史的背景を含めて、同時代の出土資料に拠って跡付ける。 楷書については、西川 寧・編『新装版 書道講座 1 楷書』（二玄社 2009 ¥2592）
7. 漢字の完成－楷書の誕生と規範化－：楷書の発展	単に楷書体の形の変化だけでなく、隷書・草書・行書・楷書の四つの書体の関係に留意して、正書体が篆書から隷書を経て楷書に移行する過程について見てゆくとともに、楷書の字体統一や印刷書体との関係についても理解を深める。 草書については、西川 寧・編『新装版 書道講座 3 草書』（二玄社2009 ¥2592）、 行書については、西川 寧・編『新装版 書道講座 2 行書』（二玄社 2009 ¥2592）、
8. 字書の変遷－漢字史からみた字書－：字書の起源、『説文解字』の世界	字書はどのように成立し、姿を変えてきたのか、字書に託された役割とはなんであったのかを、漢字の歴史との関わりにおいて考える。また、伝統的な漢字解釈の理論である「六書(りくしょ)」の概念を理解し、字書市場に經典的な地位を占める『説文解字』という字書の重要性和特殊性についても理解を深める。 字書については、白川 静『字書を作る』（平凡社ライブラリー）(平凡社 2011 ¥972)、 『説文解字』については、高橋 由利子『説文解字の基礎的研究』（汲古書院 1996 ¥2097）、阿辻哲次『新装版 漢字学－「説文解字」の世界－』（東海大学出版会 2013 ¥3024）
8. 字書の変遷－漢字史からみた字書－：楷書と字書	字書の原型は『説文解字』によって定まったが、漢字の正書体が篆書から隷書を経て楷書へと変遷してゆく中で、字書の内容と役割にはどのような変化が起きたのかを考える。

学習範囲 該当する章など	学習内容
9. 漢字と漢字音：漢字の表音的要素、中国語原音の歴史的变化	語は意味と音の結合体である。「表語文字」である漢字にとってその音、すなわち「漢字音」は不可欠の要素であると言える。この章では、中国における「漢字音」の歴史の変遷の跡をたどる。
9. 漢字と漢字音：反切と韻書、日本漢字音	この章では、表音文字ではない漢字の表音方法である「直音（ちよくおん）」と「反切（はんせつ）」について述べた後、作詩の際に押韻字を検索するために編纂された一種の発音辞典である「韻書」について、『広韻』を例に説明する。さらに、中国の漢字音が移植された日本漢字音の特色について述べる。 韻書については、中澤 信幸『中近世日本における韻書受容の研究』（おうふう 2013 ¥15,515） 日本漢字音については、高松 政雄『日本漢字音概論』（風間書房 1986 ¥4104）、沼本克明『日本漢字音の歴史』（国語学叢書）（東京堂出版 1986 ¥5900）
10. 漢字と近代化：漢字、この遅れたもの－魯迅『門外文談』	近代中国の地誌人にとって漢字はどのような存在であり、また、その「後進性」をいかに乗り越えようとしたのかを、魯迅の『門外文談』を例にとってみてゆく。 門外文談については、魯迅(著)藤堂明保(訳注)『門外文談－しろうとのことば談義－』（江南書院訳注叢書 2）（江南書院 1956 ¥?）、
10. 漢字と近代化：「表音化」と「簡略化」のはざままで、「改革」の果てに	清末以来の漢字を巡るさまざまな議論の跡をたどりながら、今日の中国で用いられている「拼音(ピンイン)」と「簡体字」の歴史的意義を理解する。 拼音(ピンイン)と簡体字については、前田晃『中国漢字を読み解く－簡体字・ピンインもらくらく』（中国語学習ハンドブック）（日本僑報社 2013 ¥1944）
11. 漢字と「漢字系文字」：「漢字系文字」とは何か、「漢字系文字」の分類	中国大陸の周辺部で生まれたさまざまな「漢字系文字」とは何か、その分布（中国西北部と中国東南部）と分類（疑似漢字と派生漢字）および個々の「漢字系文字」の特徴について見てみる。 漢字系文字については、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・編『図説 アジア文字入門』（ふくろうの本／世界の文化）（河出書房新社 2014 ¥1944）
11. 漢字と「漢字系文字」：「漢字系文字」の形成過程と使われ方	漢字に対抗する公用文字としての「疑似漢字」、「派生漢字」群の非統一性、および「派生漢字」と中国語方言との連続性について見てゆく。 契丹文字については、清格爾泰(チング・ルタイ)・編著『契丹小字釋読問題』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(不二出版) 2002 ¥27,000） 西夏文字については、西田龍雄『西夏文字の話』（大修館書店 1989 ¥1,728）、西田龍雄(著)西田龍雄(編)『西夏語研究新論』（松香堂書店 2012 ¥19,440）、西田龍雄『西夏文字－その解読のプロセス』（精選復刻紀伊国屋新書）（紀伊国屋書店 1994 ¥758）、 女真文字については、金光平・金啓琮『女真語言文字研究』（文物出版社 1980）（中国語） 古壮(チワン)文字については、蘇永勤『古壮字字典』（広西民族出版社 1989）（中国語） チュノム(字喃)については、富田健次「チュー・ノム(字喃)」河野六郎他・編『言語学大事典 別巻 世界文字字典』（三省堂 2001 ¥51,840）
12. 韓国・朝鮮の文字：ハングル以前の漢字の使用	ハングルという新しい文字体系を創制する以前は、朝鮮半島には固有の文字はなかったので、書き言葉としてはすべて漢字が使われていたが、自分たちの固有の言語を表記するため、あるいは漢文を訓読するための手段として、本来の漢文ではない「郷札」「吏読」「口訳」を用いていた。 郷歌・吏読については、小倉進平『郷歌及吏読の研究』（京城帝国大学法文学部紀要 1）（京城帝国大学法文学部 1931）
12. 韓国・朝鮮の文字：ハングル創生と漢字との関係、開化期から現代の漢字の使用	韓国・朝鮮における漢字の受容とその歴史展開を、ハングル創制と漢字との関係について見た後、19世紀末の「開化期」から現代の漢字の使用について見てみる。 ハングルについては、野間 秀樹・著『ハングルの誕生－音から文字を創る－』（平凡社新書）（平凡社 2010 ¥1058）、野間 秀樹・著『日本語とハングル』（文春新書）（文藝春秋 2014 ¥832）、
13. 日本語と漢字（1）：漢字の伝来	文字をもたなかった日本では、どのようにして中国から文字を受け入れ、自分の言語体系に吸収し、そして日本語を表記できるまでになったのか、その過程のうち「中国伝来の漢字」の時代について見てみる。 日本への漢字の伝来については、大島正二『漢字伝来』（岩波書店 岩波新書 2006 ¥821）
13. 日本語と漢字（1）：漢字の応用	文字をもたなかった日本では、どのようにして中国から文字を受け入れ、自分の言語体系に吸収し、そして日本語を表記できるまでになったのか、その過程のうち「日本人の漢字使用」の時代を、『万葉集』、音と訓、漢字から仮名へ、の三つのテーマを中心に見てみる。 日本の漢字については、笹原宏之『日本の漢字』（岩波書店 岩波新書 2006 ¥821）
14. 日本語と漢字（2）：漢字漢語の日本的変化	漢字漢語の長い使用によって、日本独自の意味用法が生じてくる。中国の用法と比較しつつ、漢字の意味と形の日本の変化について見てゆく。

学習範囲 該当する章など	学習内容
14. 日本語と漢字（2）：現代における日中漢字の異同	日本で造られた漢語、すなわち「和製漢語」の形成と、その東アジアへの拡がりを見てゆく。和製漢語については、陳力衛『和製漢語の形成とその展開』（汲古書院 2001 年 ￥?）
15. アジアの言語と漢字－漢字の受容によるアジア諸言語の変容－：漢字の移入がもたらした各言語への影響について、言語と文字について	漢字の受容を通して中国語と接した各言語が、その過程においていかなる影響を受けたかについて、語彙、音韻や文法、表記法について考え、最後に、日本はなぜ漢字を使い続けるのかについて考える。

■ 学習方法・評価

種別	評価基準
試験	試験：中国を中心とする漢字文化に関する基礎的な理解を問う。
レポート	レポートの課題解説をよく読み、参考文献をも参照して、その課題に沿ってまとめること。

■ 評価方法

- 科目試験：70%
- レポート：30%

■ 教科書

書名：アジアと漢字文化
著者名：大西克也 宮本徹
出版社名：放送大学教育振興会
出版年：
版：
刷：
ISBN：

■ 参考書

シラバスで紹介したもの以外に、およびテキストの各章末にある「参考文献」を参照すること。

■ 履修上のアドバイス

テキストの各章末にある「参考文献」を出来るだけよく読んで、「課題」を解くこと。

■ 自習時間

レポート1課題あたり20時間、科目試験のために40時間程度学習することが望ましい。

■ 担当者のプロフィール

専門はヴェトナム前近代史、日越交流史。